

井口 傑 著

足のクリニック——教科書に書けなかった診療のコツ

A5判・232頁 定価(4,500円+税) 2004年・南江堂

筆者の子どものころは、履物はゲタで、家の中では裸足で活動し、体育の時間には裸足で砂地の校庭を走りまわっていた。大人も靴を履いている人はいたが、下駄や草履を履く人が多く、移動は徒歩か自転車で行い、自家用車に乗っている人は少なかった。このようなためか足は丈夫で、当時の一般的な足の疾患としては骨折・捻挫、蜂窩織炎、刺創ぐらいしかなかったように思われる。筆者が整形外科医を志した40年前ごろもまだその名残があり、足の疾患は少なく、主だったものは先天性内反足を代表とする先天性疾患や、ポリオ、脳性麻痺などの麻痺性疾患、骨折・脱臼、感染などであった。近年、靴の装着が一般化し、車社会となり、そのため足が弱くなったせいか、多種の疾患が出現し、足の疾患を勉強しないと、整形外科の外来診療に困るような時代になってきている。

このような時期に井口傑先生が本書を執筆されたのは誠に時機を得たものである。井口先生は慶應義塾大学整形外科に足の外科グループを創設し、同科の伝統を受け継ぐ幅広い知識と爽やかな弁舌、スマートな行動で、多数の足の専門家を育てるとともに、多数の研究を指導してこられた。また日本靴医学会の常任理事を務められ、事務局をおき、靴医学の発展にも努力されている。

本書の特徴は序文に書かれているように、「分担執筆でなく、一から十まで自分1人で伝えたいことを書く」という点である。確かに本書を一読すれば、井口先生が考えておられる足の外科学がなんたるかがよく理解できるとともに、足の疾患に対して適正な診療を行う自信をもつことができるようになるものと思われる。同大学で多数の足の専門家を育てられたのもむべなるかなと思われる。

本書は序章を含め7章とコラムからなる。序章と第1章では足と足の疾患についての考え方を述べている。第2章と第3章の2章にわたり足の見方が書かれ、診断の重要性に対する著者の気持ちが表れており、本書のハイライトの1つである。盛りだくさんであるが、診断に必要なことばかりであり、それ

ぞれの項目のタイトルはわかりやすく、これを読まないと足の診察ができない気持ちにさせて一気に2章と3章を読ませる。またコラムがレジメとして理解と記憶のために役立っている。第4章の足の治療では、靴選び、靴の補正、治療靴、フットケア用品、足底板を取り上げている。これらの項目は従来の教科書には記載されていないが、日常診療で欠くことのできない治療であり、本書のハイライトの1つである。お読みいただき、十分に理解していただければ、これらの治療を装具士、理学療法士、シューフィッターに任せきりにして、せっかくなつく治療靴や足底板が患者さんの家の床の間を飾ることはない。またこの章では適正な注射の打ち方も書かれている。これもこれまで教えてくれる教科書がなく、自己流に注射している場合が多いと思われるので、たいへん有用である。第5章の疾患別フローチャートは簡潔で、鑑別診断を行っていくうえで役に立つ。第6章では部位と疾患として、121という多数の疾患について、まずその疾患から生ずる痛みについて記載し、それからその疾患についての説明と治療について、簡明に記載している。治療は保存的治療が主体で、手術的治療についての記載は少ない。これは、「まず教科書を読んでからこの本を読んでほしい」と序文に書かれているように、手術的治療については教科書にゆずり、日常診療での理解に役立つように、浅く、広く多数の疾患を紹介しているためである。

本書は、整形外科の研修医、専門医のみならず、プライマリ・ケアを行う医師、理学療法士、義肢装具士、シューフィッターの方々にとって実用性の高い価値ある教科書であり、自信をもっておすすめしたい1冊である。

(愛媛大学整形外科教授・山本晴康)

